



## —馬との暮らし—

### 馬越に住む井出栄さんに馬との生活を伺う

八千穂高原インターを降り、国道299号を八千穂高原に向かう。左に曲がり上に上がっていく丘に馬越の集落がある。

栄さんは、「井出福博さんが土曳きをした材木でNHKのアンテナを建てた、いくつも。おらほは、ほ一土曳きをした両手抱えもある丸太を8本ぐらい薬につけて、削って継ぎ手して建てた。」と仰る。その当時は、材木を使ってアンテナを山の中に建てたのだそう。栄さんは、農耕馬として牝馬で栗毛色の馬を飼っていた。耕運機がない時代に田起こし、田掻きの時に、車がない時代に運送として、桑の葉を運んだり、米を運んだりしていた。



明治元年築の井出栄さん宅

「家族で1頭飼い、毎年種付けして1頭生まれる。良い馬になれば、軍馬として良い値が付くからな。川上、南牧、あっちは、何頭も飼ってた、耕地がうんと広えから。白田、田口あたりの人は、春先はへー早いから川上っから馬あ借りて、それで、田んぼして終わると川上に返しに行ってた。」「夏は、千代里牧場で放牧していた。秋には引き上げて寒い時には、家で飼っていた。」

栄さんところの馬は、牝馬ながら、先頭を走り、子分たちをひき連れて走るリーダー的な馬だったそうだ。「よた馬だったから。」と栄さんは笑った。そんなリーダー的な母馬が出産した何頭かは軍馬になったという。毎年種付場所（馬の種付けをやる場所）に連れていき、生まれた子馬は馬流まで売りに行ったそうだ。売られてしまった夜、親馬は2、3日はいななき悲しんだ。「馬が売られる時期は、決まっている。馬も牛も生まれた子は、半年は一緒にいる。離すときは、嫌だよ。せつないで。」と栄さん。

馬は足が速くて扱いが大変で、田んぼの鼻取りをしても泥だらけになるが、仕事が早くてあつという間に終わる。牛は馬に比べて眠くなるほど作業が遅い。馬なら1日で終わる仕事が、牛は田んぼ1、2枚しか出来ない。馬は繊細だから、繁殖期の春先は大変だった。「牡馬がヒヒンと泣くずら、牝馬も反応する。あっちの田んぼ、こっちの田んぼ、ヒヒンと泣くと大変だった。飛び出しちゃうことがある。一緒にいれば、引きずられる。馬は背も高いし、力も強い。放すと飛んでいくから危なかっただよ。」と栄さん。馬は、昭和24、25年ごろまで飼っていたそうだ。農耕馬は、ほとんどが牝馬、気性が穏やかだからだそう。

栄さんは自宅から片道5キロかけて小海町の旧北牧小学校（今の北牧楽集館）まで通っていた。今の佐久総合病院小海分院の場所に種付場所があり、子どもたちが写生会をしていて、種付けを絵にかいてしまい、先生に叱られた人がいたんだよと話してくれた。

車社会となり、運送に馬の力を必要としなくなり、農耕も穏やかで繁殖期が通常の牛のほうが扱いやすく、飼い主の体力に合わせて馬から牛に移行していったようだ。馬とともに生活した、栄さんの明治元年築のお宅を拝見し、土間で餅をつき、つきたてのお餅を馬にあげた話を伺った。人と馬が同じ屋根の下で生活していた当時の様子を想像し、とても温かい気持ちになった。



馬屋だった場所

さくほ集落の話の聴き手 公式note  
<https://note.com/sakuhosyuraku>



### 募集

現在の佐久穂町内で撮影された「古い写真」を募集中！

写真プロジェクトでは、この地域に暮らした方々の古い写真とエピソードを募集し、2月下旬から茂来館にて写真展を開催します。デジタル写真の存在とは違い、カメラも珍しい頃のもの、その時代を知るとも貴重な存在です。写真をお持ちの方はぜひご連絡下さい。

時期 おおよそ大正12年頃～昭和30年代位

内容 日常的な風景や景色でも構いません  
(こういったお写真かお話を聞かせてください。)





## 上野と人の暮らし



笑顔が素敵な佐藤きみいさん

佐藤きみいさんは本間川（小海町）出身、結婚して上野に住んで、64年になる。『きみい』という名前が珍しいですねと言うと、「母親が『きみえ』という名前前で届け出してくださいと父親に頼んだら、『きみい』で届けたらしいです。」きみいさんは、夏は畑仕事、冬は、こまかい仕事が好きなので、炬燵で編み物をして過ごすという。デイケアに行ってますかと尋ねると、「私はまだそんな.....。」と、ニコッと笑った。

「上野の思い出と言えば、道沿いに大きな柿の木が何本もあって、秋になると柿の実が色づいて、その色が道を照らすようで、本当に明るかったです。」

長生きの秘訣は何ですかと尋ねると、「小学校の6年間一度も休まず通ったので、皆勤賞をもらいました。一番上の姉と兄は96歳で亡くなりました。弟に言わせると、90歳をすぎないと（天国行きの）チケットはもらえないらしいと言ってます。何より、岡谷に住む孫家族がひ孫を連れて毎週土日に帰って来ます。ひ孫と遊んでいると元気になります。」



上野集落の夕焼け

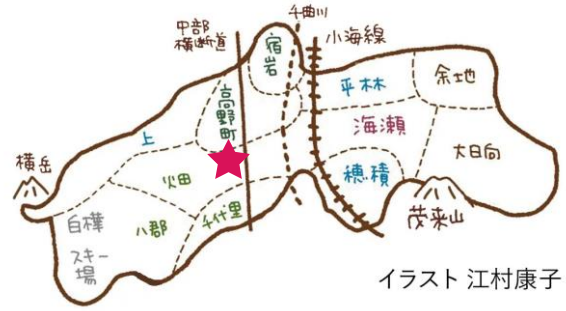


イラスト 江村康子

石川武・ひろ子夫妻は移住して34年になる。移住のきっかけは、本を読んだことだという「あの当時は、田舎暮らしとか脱サラ農業の本がたくさん出版されていた。それを読んで、自分でも有機農業ができるんじゃないかと思った。」17年間、1町の畑で40品目の有機野菜と600羽の鶏の卵を売ってきた。「私たちは、一般家庭の食卓に並ぶ野菜を届けたいという思いから少量多品目野菜の栽培に取り組みました。自然のサイクルに従って、旬の野菜を届けるというシンプルな考えで農業を続けてきました。有機野菜と養鶏の二足のわらじで忙しかったけれど、好きなことをやっているの、面白かった。土と触れ合い、野菜と会話している時、生きている瞬間が実感でき、楽しかった。」

ひろ子さんに上野の暮らしを聞くと、「国道から近いし、なにより、子供たちが学校までの2kmの道を歩いて通えたことが素晴らしかった。上野で暮らす人たちは考え方も新しく、閉鎖的でなかった。『困った時はお互い様だに。』の持ちつ持たれつがこの集落にはあったので、上野と縁があったことに感謝しています。」

佐藤重治・敏子さん夫妻は結婚して56年になる。敏子さんは大石生まれ、「だから、私は井の中の蛙です。」重治さんは定年退職してから、自家用野菜を作り始めたという。冬は書道をして過ごすことが多いという。重治さんは書道師範の免許を持っているので、野沢小学校の3年生に週3回教えに行ったこともあるという。

「子供たちは、初めて書道をするんだけど、それは一生懸命書いてたな。」敏子さんは10年位前から、パッチワークに取り組んでいる。教室が中込にあって、月2回通っていた。「パッチワークを習うんだけど、楽しみはお昼ご飯を一緒に食べながら、おしゃべりすること。人と交流するのが好きなの。」

上野にも神社がある。「子（ね）の神様のことだな。そういえば、お椀がぶら下がっていたこともあった。」と、重治さんが言う、「それはお乳が良く出るようにとお願いしているの。」と、敏子さんがすかさず、解釈を入れてくれた。元気の秘訣を聞くと、「好きなことをやってること。それと孫にパッチワークをプレゼントしたり、料理を作って食べさせると、『おばあちゃん、とっても美味しいよ、』と、言われる。「それが励みになります。人の役に立っていると思うから。」

(文責 西村寛)

こぼれ話やその他記事等は公式noteにて公開中！

佐久穂 集落 note



発行・問合せ：佐久穂町役場 総合政策課 政策推進係

TEL.0267-86-2553 〒384-0697 長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地

